

# グローバル人材育成における 教職中間ポストを新設

## 千葉大学

千葉大学は、多様な学問を横断的に学ぶ国際教養学部を2016年度に新設する予定だ。

それと同時に、教員と職員の役割を併せ持つ新たな専門職「SULA」を設置。

既存の専門職の職務を拡大、発展させて、

履修支援、カリキュラム設計支援など、学生、教員双方に深く関わる。

新学部、さらには将来の千葉大学の人材育成を支える存在として、大きな期待が寄せられている。

### 学生一人ひとりに 最適な履修科目を助言

千葉大学に新設される国際教養学部のカリキュラムの特徴は、「文系と理系の学問領域の混合（ブレンド）」だ。「国際」「日本」「科学」をキーワードに、人文社会科学、自然科学、生命科学の各分野から、学生が興味・関心や身に付けたい能力に応じて科目を選択し、3年次進級時に専門を決める。海外留学が必修で、インターンシップ等の体験も推奨されるが、これらはあらかじめ具体的な中身が設定されているわけではなく、目的に合わせて適切な時期と期間、場所、プログラムを学生自身が決める。

こうした自由度の高いカリキュラムの中で、学生が一人で体系的に科目を履修したり、体験先を選んだりするのは容易なことではない。既存学部ではクラス担任等の教員がその役割を果たしてきたが、同学部の科目の範囲は広く、教員が自身の専門領域以外での確かなアドバイスをすることは難しいと考えられる。

そこで、同学部の科目を中心とした全学の教育リソース、さらには海外の

大学やインターンシップ先に関する幅広い知識を備え、全学年を対象に学修支援を行うSULA（Super University Learning Administrator：スーラ、千葉大学による造語）の設置が決まった。教員と職員の間際のポジションの専門職だ。各学生が目標を実現するための最適なカリキュラムを組めるように相談に乗る。定期的な面談の機会を設けることも考えられている。新しい科目や留学制度を設定した場合は、教員だけでなくSULAも学生に説明する役割を担う。

学生各自が目標を設定し、教員やSULAに相談しながらニーズに合わせて履修を進めていく方式を、同学部は「ティーラーメイド教育」と称し、特色の一つとしている。同学部の設置は2014年度に選定されたスーパーグローバル大学創成支援（タイプB。以下、SGU）で謳われたものであり、構想の中でSULAは最重要な支援機能として位置付けられている。

学生へのアドバイスと並んで、教員に対する提案もSULAが受け持つ重要な役割だ。教員が作成するカリキュラムや実際の授業内容を俯瞰的に見て、ディプロマポリシーを実現するために

必要な科目や、世の中の動きに合わせて変えたほうが良い授業内容を指摘する。この役割が機能すれば、教員は自身の研究と、それを直接的に反映する教育により専念できるという。

SULAは、学部棟内のオープンスペースの一角で、若手教員と机を並べる予定だ。学生からも教員からも気軽に接触できることを重視する。

新学部およびSULAの構想に関わり、その名称も考えた渡邊誠理事は、「国際・日本・科学をブレンドして学ぶ考え方は今後、千葉大学全体の教養教育のポリシーになる」と述べる。当面SULAが設置されるのは国際教養学部のみだが、将来的には全学部に展開する予定だ。

### 専門的職員の先行実績が 新たな職域を生んだ

同大学には、既に学修支援などを専門的に行う職員が複数置かれている（図表）。

アカデミック・リンク・センター（附属図書館と一体的に運用され、コンテンツ制作室やアクティブラーニングのスペースの企画・運営を行って

いる）に勤務する「ULA（University Learning Administrator）」は、教材作成の支援、教育用ICT環境の整備等を担当している。

2012年度選定のグローバル人材育成推進事業では、新たな職員として「アマヌエンス」を導入した。学生に対しては海外留学支援や留学先での成績の確認、フォローなどを、教員に対しては語学、インターンシップ、ボランティアなどの科目の開発協力を行う。海外の大学の卒業者や留学経験者を外部から雇用し、本部および学内のグローバル化をリードしてきた工学部に配属している。渡邊理事が共同研究先である欧州の大学で、「授業や履修に関してあらゆる相談を受け付ける電話帳のような職員」の存在を知り、同じ呼称にした。

ULA、アマヌエンスはそれぞれ増員や職務拡大の議論があったが、SGU

の構想の中で、両者の機能を併せ持ち、より高次元な役割を果たす職員への要請が高まり、SULAが誕生した。国内の大学では先端的と言えるSULAの着想は、これまでもこうした専門的職員の必要性を論じ、配置してきた実績の上に築かれたものといえる。

### 将来は120人体制へ 大学院での養成も検討

2016年度、新学部に着任するSULAは2人。学務系部門での勤務経験があり、学生とのコミュニケーション能力が高い中堅以上の職員が抜擢された。カリキュラムの策定過程にも立ち会い、教育内容を把握する。

人数は徐々に増やし、数年以内に学内からさらに3人の登用をめざす。登用の前後には、2015年度、文部科学省からFD、SD分野における教育関係

共同利用拠点に選定されたアカデミック・リンク・センターが提供するSD研修や、海外大学で教育システムを学ぶ研修制度などを利用して能力を培う。ワークスタディ制度を設定し、教育学等を専攻する大学院生にパートタイムで働いてもらうことも検討中だという。今のところ、SULAに必要な能力を養う機関は国内にないため、当面は内部人材に登用する。仮に外部から雇用することになった場合は、海外で学んだ人材に限定する方向だ。

「SULAの持つ職能は、他大学でも需要があると考えている。大学院に養成プログラムをつくり、本学をはじめ全国の大学に人材を送り出す構想もある」と渡邊理事は述べる。

SGUの補助事業期間が終了する2023年度までに、学部の1年生20人に1人の割合で、全学部に合計120人を配置するのが目標だ。担当する職務も、教材作成支援、ICT支援、就職支援などに拡大したいという。

2015年11月現在、課題として議論されているのが人事面での位置付けだ。専門性を重視して異動のないスペシャリストとするか、他のポストも経験させて学内事情に精通した「専門性を持つ一般職」とするか。希望者を募り育成するか、職務に適した人材を指名し、異動させるのか。待遇面も含め、検討が続いている。

「将来的には大学の教学マネジメントの中で、教員と同じくらいの立ち位置になって、大学の発展に貢献してほしい」。同大学の教育が大きく変わろうとしている中、渡邊理事は期待を込めて語る。

図表 千葉大学の専門的職員（例）

名称	採用方法 身分	職務内容
ULA (University Learning Administrator)	外部から雇用 アカデミック・リンク・センターの専任職員	学生や教員向けのサービスとして、学習や教育資源作成をサポートする。学生によるICTサポートサービスのマネジメントも担当する。
アマヌエンス	外部から雇用 学務担当の有期職員	留学相談への対応、留学の促進活動。担当学部の教育に関する知識を基に、教員に対して、語学、留学プログラムの構築や授業を、その中身と合わせ提案する。
SULA (Super University Learning Administrator)	当面は内部から登用 専任職員だが、他の職員と差別化するかどうかは検討中	学生の適切な授業選択、キャリアパスの構築をサポートする。全学の教育に関する知識を基に、教員に対して、科目の新規設置や授業内容を提案する。